

【翻訳】

房瑞麗 《宋代三家〈詩〉文献成果概要》
其一

甲 斐 勝 二*

翻訳に当たって

ここに翻訳して挙げるのは、房瑞麗*¹先生の著書《清代三家〈詩〉文献研究》（北京中国社会科学出版社 2018）の第1章第1節である*²。この書の本来の目的は書名の記すとおり清代の三家《詩》研究の論述にあり、翻訳する部分はその前史となるものであるが、管見の及ぶところ、日本では類似の研究は少なく、宋代の詩経研究の参考になると思われ、また訳者が関わる中国の文論研究にも大いに役立つところがあると興味をもった。翻訳紹介する所以である。

宋代の三家詩への注目について、宋代の《詩経》研究の新氣象として房先生は別の論考で以下のように纏めている。

宋代は学術が発展した特別な時期であり、清の皮錫瑞は“経学が古を変えた時代”と称している。宋代は、《詩経》学の歴史が発展する重要な時代で、“古を変える”ことにより様々な特色が形成された。近年来少なからぬ学者が異なった角度から宋代の《詩経》学に検討を加えている。例えば、譚徳興の《宋代詩経学研究》、郝桂敏の《宋代詩経文献研究》、陳戦峰の《宋代詩経与理学》などがあるが、宋代の《詩経》学における三家《詩》への注意と運用に対しては、まだほとんど触れられていない。しかし、宋代の《詩経》学的发展にあつては三家《詩》に関する意識が次第

* 福岡大学人文学部教授

*¹ 訳注：中国・計量大学人文学院・副教授

*² 訳注：表題に示すように、訳文では、原書の《 》を使って書籍名や雑誌名および作品名・篇名を示し、引用は“ ”を、引用の中の再度の引用は ‘ ’ を使った。

に高くなっていき、南宋の王応麟が三家《詩》の佚文を集めた专著——《詩考》にまで到る。これがやがて清代の三家《詩》学の逸文研究の復興全体に影響を与えるに到ったのだ。これは宋代《詩經》学発展の新氣象といえるものなのである。（《宋代詩經研究的新氣象》《浙江学刊》2013年第2期 提要）

訳文の内容についてももう少し詳しく述べておきたい。

先秦時代に孔子学派の主要課本として重視されていた《詩》は、秦を経て漢代になると、儒教の国教化にともない經典化し《詩經》となった。秦の焚書をへて、今文に基づく韓・齊・魯の三家の解釈は国の学館に取り上げられて公に行われたが、その後現れた趙の毛亨の古文に基づく毛詩は、学館に挙げられることはなかった。しかしながら、毛詩は孔子の高弟である子夏がつけたとされる詩序と共に世に流行浸透して行く。やがて漢が滅び魏晋を経て南北朝に至ると、三家のなかの齊、魯の詩説がまず失われる。唐代になって皇帝の指示で毛詩に解説を加えた《毛詩正義》が編輯され、やがてこれが科挙試験の基準課本として制定されるや、《詩經》の理解を毛詩一辺倒にさせ、韓詩は継承者が絶えて滅びていく。しかし、宋代になると近世の気配が濃厚になる中、古典伝統への懐疑が始まるにしたがい、毛詩に子夏のものとされて詩文の解釈を制約していた詩序にも疑問が生まれ、毛詩に先立つ（したがって詩經の真実により近いはず）齊魯韓三家の《詩》説を利用しながら、毛詩とは違った解釈を提示するものが現れ始める。翻訳掲載する房先生の論文は、宋代におけるこの三家《詩》利用による詩經解釈の流れを文献を通じて論じるものである。そこでは、まず宋代に現れる三家詩への注目とその利用の流れが示される。そして南宋の朱子の《詩集伝》の登場でそれが集大成され、その朱子の影響をうけ、散佚していた三家《詩》の輯佚を試みた王応麟の《詩考》の登場が、清代の学術に一分野を形成した三家《詩》輯佚の学問を導いていくことが示されている。訳文其一では、その前半部分、朱子以前の7種の文献について述べられる部分を掲載し、其二では、朱子と王応麟についての部分を掲載する予定である。

もっとも、毛詩の詩説に対する疑念は、唐代でもないわけではなかった。房先生はこれについて以下のように述べている。

唐代王朝の建国以後、儒学の発展を推し進め、經学の統一を実現するために、唐の太宗は孔穎達に命じて《五經正義》を編纂させた。高宗の永徽四年（653）に頒

布施行し、全国に伝えさせ、士人の子弟に学習させて科挙試験の参考書とした。皮錫瑞《経学歴史・経学統一時代》では、“唐代から宋代にかけて、明経科での採用では、ずっとこのテキストを参照した”と言っている。その影響の大きさがわかる。《五経正義》の編集制定は、経書の文字、訓詁、釈義に統一された標準をもたらした一方、経書の注釈に一尊化をみちびき、思想は次第に硬化してしていった。このような統一化と硬化された思想を目の前にすれば、見識のある者なら当然その突破を試み、この硬化した土壌を打ち破ってなにかの新しい思想を現そうとするのが当然だ。例えば《新唐書・儒学伝》には、“大暦年間（766～779）、（啖）助、（趙）匡、（陸）質は《春秋》で、施士句は《詩》で、仲子陵、袁彝、韋彤、韋苴は《礼》で、蔡広成は《易》で強蒙は《論語》で、その学問に名をあげた。そのなかで士句、子陵が最も目立っている”とある。それぞれの人物が“その学問に名をあげる”ことこそ、限界を突破するものであり、それは伝統経学への反動に他ならない。それだけではなく、彼らは経書の真実性にも懐疑を持ち始めていた。例えば劉知幾の《史通》にある《疑古》、《惑経》二篇では、伝統経学への挑戦が始まっている。《毛詩正義》の頒布施行は《詩経》の研究を《毛詩》一尊にしてしまった。しかし《詩経》に関する学者たちの古典批判は、（毛詩の）《詩序》に向けて始まっている。韓愈は“子夏は《詩》に序はつけていない、漢代の儒学者どもが、その学問をはっきりと打ち立てようとして、子夏の名を借りて偉そうにしたのだ”と考えたが、これが序に疑問を持つ初めであった。これに対して唐の成伯璵の《毛詩指説》は、漢代から宋代の《詩経》の変形と三家《詩》の輯佚と復興の流れの上で、直接あるいは間接的な作用を果たすものである。《毛詩正義》を除けば、唐代中後期にでき、わずかながら比較的まともに残る唐代のこの《詩》学著作は、まさに“唐代の《詩経》学の研究成果をしめす重要なものであって、唐代の経学を研究し、また中晩唐の経典学説への異議の現象を考察して、宋学がもつ古典批判の気風の興るところに遡ろうとすれば、必ずや深く研究すべき典籍である”（侯美珍《成伯璵〈毛詩指説〉之研究》、《河北学刊》1997年2期、第61頁）と言われる通りだからである。成伯璵は“官職出身地不明”で、《毛詩指説》の全文はわずかに六千字にすぎない。《四庫全書総目》では、“書籍は全部で四篇、……二篇は《解説》といい、先ず詩義を釈明して風・雅・頌が次ぎ、周南が更に続き、詁、伝、序がまた続き、篇章がまた続き、后妃がまた続き、《鶉巢》、《騶虞》で終わる。概ねは《周南》一篇を挙げて、

正しつづ順番に論じて、さらにその他の問題にまで広げて行く。三篇は《伝授》で、齊、魯、毛、韓四家の受け継がれ方を詳論し、また後世の儒学者の訓釈の源流を詳述する”という。そこに伝えられる反動的思想の《詩》学の気配は《解説》と《伝授》の二篇の中に現れている。例えば、《解説》篇で、《詩序》に関して、成伯璵は小序の首句を子夏の原文だと考えている。ある学者はこれについて、“成伯璵の主張は、確かな理解とは見なせないけれども、小序の首句をその後にくく説明の部分と切り分けて考えており、そこには独自の見識がある。前人の所論と比べ一歩進んだものだ。持論の理由もまた後人を啓発するもので、後の《詩序》の作者に関する議論に大きな影響があった”（同上書、第64頁）という。例えば宋代の蘇轍《詩集伝》が句首を独立させているのは、その啓発を受けたもので、その後の王得臣、程大昌、李樗の“蘇轍の説を祖とした”のも、成伯璵の新説と密接な関係がある。しかしながら、成氏の《詩序》認識の意義は、只にその後の《詩序》に関する認識への影響にあるばかりでなく、さらに《詩経》学界において經典に疑惑を持つという研究方法をしめすことで、北宋《詩経》学に盛り上がった經典への疑惑という思辨的学風の発展を導いたところにある。この經典に対する疑惑という思弁的学風の発展は、宋代三家《詩》学の拡大を導く上で重要な前提となるのである。（同上論文）

宋代は皇帝と士人層による政治支配が完成された時代である。貴族層の影響を受けていた唐代の社会の気風や考え方とは違った思想背景が彼らを導いていたに違いなく、それが所謂宋学と関係が強くあったことに疑いはない。宋の文学に現れる宋代的な特徴も、中唐あたりに兆すことを考えれば、宋代に盛り上がる經典への懐疑が中唐に始まることも十分理解できよう。訳者としては、その新たな社会気風や考え方が、従来の経解釈に再解釈を迫ろうとするとき、現代に首肯される各種の問題にどう近づくのかに興味があった。社会が継承発展して現代があるとすれば、その社会を支えた思想も変化のたびに継承発展して現代に近づいているはずだからだ。

特に民間歌謡を集めたとされる《詩経・国風》の場合、そこには男女の情愛の歌も多くみられる。情愛自体は個人間の問題であっても、社会を構成する家族の問題とも大きく関わること、疑いはない。《詩経》に歌われる情愛の詩が聖人の教えと結びつけて説かれるとき、現代ではかなり自由大胆に歌われる個人の情愛も、中国歴代の王朝統治の下でそのまま許されたわけではない。そもそも情愛の表現は人間にとって生活における

基本的なものであるから、どの時代であってもこれが無視されるものとは思われない。したがって、それぞれの時代に応じてその情愛を社会道德のなかでいかに解釈し位置付けるかということが問題になってははずであり、その解釈は社会の発展と共に進展してきたはずのように思われるのである。その許容の領域の幅は経済的な進展の程度に応じた社会の発展度とも関係もしよう。だとすれば、王朝社会を支えてきた経学思想の主要テキストである《詩経》の詩文の解釈はこの関係の処理とかなり密接な関わりがあったはずなのである。房先生の論は無論それが目的ではないのだけれども、その記述からは、宋代における三家《詩》への注目に対する以上の視点からの考察も可能に思われた。つまり、近世の初期とも言える宋代において、中世に力を得て唐代以降一世を風靡してきた毛詩の解釈では納得されなくなり、それを越えるための文献的裏付けとして三家《詩》が発見され用いられる事になったと推測しうる情報が並べられているようにも見たのである。これが、翻訳を試みた文論研究に関係する訳者の興味である。

房先生は、一昨年福岡大学人文学部に研究員として来日されている（2017.9~2018.3）。日本では、文献資料収集や関係学者との交流などの研究活動を行われた。しかしながら、しばらくの間同僚であった房氏がどんな研究をされているか本学でも知る人は少なかつたし、また管見の及ぶところ三家《詩》をめぐる日本での研究もまだ少ないようなので、ここに訳出しその仕事の紹介をしようというのも、翻訳掲載の動機の一つである。訳文は著者に確かめて訂正した所や語句を補った所もあるが、内容に関係しない所は記してはいない。これにより我が務めの一つである外国学の紹介がすこしでも果たせればと思う。しかしながら、実力不足による誤訳や勉強不足による思い違い間違いも多いに違いなく、ひたすら御指正を請うばかりである。

最後に、この論文の翻訳を了解され、翻訳時における質問にも丁寧に答えて下さった房先生にお礼を申しあげたい。

翻訳

宋代三家《詩》文献成果概要*¹（其一）

概要

魯、齊、韓三家《詩》の發展は両漢時代に極めて盛んになったのだが、魏晉南北朝時代になると、三家《詩》は亡佚したり、伝えられなくなってしまった。隋唐の際の陸徳明《經典積文》には、“齊詩”は失われて久しく、《魯詩》は南朝まで伝わらず、《韓詩》は残ってはいるがその解釈を伝える者がいない”^{*2}という。《隋書・經籍志》ではそれを承けさらに説明を進めて、“齊詩”、魏の時代にすでに亡失し、《魯詩》は西晋で滅びた。《韓詩》は残ってはいるが解釈を伝える者はいない”^{*3}という。《韓詩》は北宋ではまだ存在していたこと、《太平御覽》にみえるが、その後は伝えられておらず、現在は《韓詩外伝》が残るばかりである。三家《詩》は次々に亡佚したが、三家《詩》学のほうは《詩經》学および輯佚学の發展に従って、宋代以降になると《詩經》研究の重要な構成部分となっていたのである。三家《詩》学の發展という角度から見ると、朱熹の《詩集傳》中での三家《詩》説の採用や王応麟が朱子の啓発を受けその後清代に影響を及ぼ

*¹ 訳注 この部分「第一章 清代三家《詩》文献研究概論」の下におかれるもので、その前に以下の文章がある。その本来の著述の目的を知ることができるので上げておく。

如何なる學術現象の發生であっても、多方面の要素の共同作業の結果であり、その誕生は長い時間をかけて醸し出され、実践を繰り返して、ようやく世に行われるようになるものである。余英時先生は《論戴震與章學誠》の書の中で、學術思想の変化を描写するとき、“内在理路”の説を採用されたが、“‘内在理路’説は學術思想の変遷にもそこにはその自主性があることを示すまでのことだ。指摘しておかねばならないことはこの‘自主性’は相対的なものに過ぎず、絶対的なものではないこと、學術思想の動向はその時その時で外在環境の動向の影響を受けることも否定できない客觀的事実だということだ”とも言われている。内部の要素の自主的な変遷と外部環境の後押しの共同作用が學術思想の發展と変化の原因なのである。魏晉以來失われて久しい三家《詩》が、清代に全面的に復興され、清代經学の發展と歩を重ね、また清代學術發展を構成する重要な一領域となりえたのは、清代考証学や輯佚学發展が生み出したものでもあり、また前代の学者による研究の蓄積と深い関係があるものだ。本章では、先ず宋明時代の三家《詩》研究を整理し、三家《詩》輯佚の發展史を遡り、清代三家《詩》輯佚の興起を導いた文献の蓄積及び文献の準備の情況を示し、それによって清代前期の学者の三家《詩》輯佚の興起のために行なわれた準備の業績を考えてみたい。

*² 原注：唐陸徳明《經典積文・叙録》、影印文淵閣《四庫全書》本

*³ 原注：魏徵等《隋書・經籍志》、北京：中華書局、1973年、第918頁

す三家《詩》輯佚の専著《詩考》を作ったこと、これらは決して偶然ではない。それは、学術界や思想界で長期にわたって行われていた《詩經》学領域での古を疑い經に疑惑を呈するというもので、革新を求める必然的態から導かれたものなのである。

一 概述

北宋のころ、經学研究の領域では、晩唐の疑義辨析の氣風を受けて古典批判の学が大いに盛り上がったが、劉敞の《七經小伝》が通常その氣風を開く先駆けとなったと見做されている。晁公武《群齋讀書誌》には“宋元祐の史官によると‘慶曆（1042~8）以前、学者は文辞を重んじ、章句注疏の学を守る者が多かったが、劉敞になって、諸学者の説に異を唱え始めた’”^{*1}とある。陳振孫《直齋書録解題》には“前代の經学は概ねが師匠の説くままに述べる注疏であった。自分の考えで經を説き、著書として世に伝えることは、劉敞の提唱による”^{*2}とある。《毛詩》のみ独り行なわれて詩序・毛伝・鄭箋・孔穎達疏が一体化されてしまった状態への反省も《詩經》学界では始まった。詩序を疑い、詩序を否定するという学術論争がここから展開するのである。宋代儒学者が詩序を棄て毛、鄭の説に反駁否定を唱えようとするとき、見つけ出した最も有力な証拠、それが即ち三家《詩》序であり三家《詩》説の存在だったのである。

1. 欧陽脩《詩本義》

欧陽脩の《詩本義》は宋代《詩經》学の出発作であった。四庫館臣は評して、“唐以来、詩を説くも毛伝や鄭箋を議論の対象にしようとする者はいなかった。熟練した儒学者ですら、《小序》の説を謹直に守ったのだ。宋になると新しい内容が日々に入ふえ、旧説はほとんど廃されるばかりとなる。その始まりを遡れば、確かに欧陽脩から始まるのだ”^{*3}と言っている。宋代の詩經学全体の発展に対して広く深い影響を生み出したのだった。《詩本義》は《詩序》が子夏の作とは信ぜず、本義を以て詩義を求めることを旨とし、毛伝、鄭箋の誤りを明らかにした。例えば《序問》では《詩序》に対する質疑

*1 原注：南宋 晁公武《群齋讀書誌》、孫猛校証、上海：上海古籍出版社、1990年、第143頁。

*2 原注：南宋 陳振孫《直齋書録解題》、徐小蛮、顧美華点校、上海：上海古籍出版社、1987年、第82頁。

*3 原注：清 永瑢等《四庫全書總目》、北京：中華書局、1965年、第121頁。

が行われる。そこには、“或ものが《詩》の《序》は、先秦の卜商（子夏）の作か、漢の衛宏の作か、二人の作ではないとすれば、作者は誰かと問うた、それにはこう答えよう。《書》《春秋》には共に《序》がありその著者の名を記しているの、その作者を知りうるが、《詩》の序にはその名前を記していないので、分からないのである。とはいえ、子夏の作でない事は分かる。なぜそれが分かるのかと問うならば、こう答えよう。子夏は学問を孔子に親しく授かったので、詩の正しい意味を孔子から受けているに違いない。序では《風》《雅》に変と正の二種があると言ひ、《閔雎》《鶉巢》を論じて周公召公に結びつけている。子夏が詩に序をつけたとすれば、そんなことは言うはずがないからだ。”*1 この説に、南宋の鄭樵が啓発された。鄭樵は《詩辨妄》のなかで、更に歩を進め、“もしも子夏がこの序を伝えたとするならば、なぜ齊や魯の詩説が先に出たおり、その学者たちがその言葉を伝えず、趙の毛氏になってようやく出現したのか。《序》が趙でようやく出てきたのだとすれば、いったいどこから伝わったのか”*2 と論じて、三家《詩》との比較のなかで、《詩序》が子夏の作ではないことを論証したのだった。

しかしながら、歐陽脩はやはり《毛詩》を遵奉していた。彼は、“聖人が没して以来、六経は多くが失われ、一つの經典学問も数家に分かれ、異説も尽くしがたい。漢の初めに当たり、《詩》を説くものは、齊、魯、韓の三家に分かれ、遅れて毛氏の《詩》がようやく出てくる。長い間に、三家の学説は皆滅び、《毛詩》のみが行われるようになって、現在に至るまでそれが続いている。現在齊や魯の学説は没して見ることはできない、《韓詩》はその学説が他の書籍の中に遺されているものの、その経文すら違う時がある。例えば“逶迤”、“郁夷”等*3 がそうである。しかし、その全体を見ることができないので、その是非を知ることはできない。漢より以来、学者は多かったが、結局三家を捨て

*1 原注：北宋 歐陽脩《詩本義》、影印文淵閣《四庫全書》本。

訳注：孔子の《詩經》についての理解は、“一言以て之を蔽えば、曰く思いに邪無し”であり、この中には毛詩序に云う諷刺を含む變風・變雅という概念は含まれていないはずである。したがってその孔子の弟子である子夏も《風》《雅》に正・変を分ける考え方はないはずだ、と歐陽脩は考えている。《詩經》を經典として倫理道德の意義を強調するのは前漢經典化される武帝のころに始まるもので、春秋末の子夏にこのような発言があるはずはないからである（著者からの解説による）。

*2 原注：〔南宋〕鄭樵《詩辨妄》、顧頡剛輯点、《統修四庫全書》影印本。

*3 “逶迤”、“郁夷”等 訳注：この部分《毛詩・小雅・四牡》の“四牡騤騤、周道倭遲”の詩句“倭遲”を《釈文》に引く韓詩が“逶夷”に作り、《漢書地理志》顔師古注に引く韓詩が“郁夷”に作り、《文選》李善注に引く韓詩が“威夷”に作る事などをいうと思われる。

て毛公に従ってきたのは、たぶんその源流の拠り所が、聖人の主張を多く得ていたからではあるまいか”^{*1}と言うのである。しかし、彼は《詩本義》の中で、毛伝鄭箋の間違えを正す具体的な論述を多くのせており、上掲の主張と矛盾する。欧陽脩は三家《詩》説の存在を意識はしていたとはいうものの、《毛詩》と三家《詩》をうまい具合に調和させる道筋をまだ捜し当てていなかったことがわかる。また彼の“《韓詩》はその学説が他の書籍の中に遺され”という言葉は、朱熹の“文選の注には《韓詩章句》を用いることが多い”という説に先立つものでもあった。

2. 董道の《広川詩故》

毛伝、鄭箋への懷疑から三家《詩》を引いて拠り所にするまでには、長い時間が必要であった。正しくある学者が“慶暦（1041-1048）以来、劉敞、欧陽脩、蘇轍など《詩経》に関する新説は、毛伝、鄭箋、孔穎達《疏》に対する懷疑のほうが多く、三家《詩》についての注意は十分ではなかった。徽宗朝（12世紀初め）のころ、古器物や、古書籍などの収集の風潮が起こった。儒学者が詩を説くときでもまた、古字を求め、古義を求め、古説を求めることが多く、その中の一領域が三家《詩》の収集と重要視だったのである”^{*2}と言う通りである。南宋董道の《広川詩故》はこの領域でかなり目立つものとなっている。

董道の伝記は、《宋史》《宋元学案》にはなく、《四庫全書総目》巻112《広川書跋提要》に“道、字彦遠、東平の人。広川と題したのは、郡望に従ったものである。政和年間（1111-1118）に官は徽猷閣待制となる。王明清《玉照新志》には、‘宋齊愈の裁判文書に司業の董道坐にあり’と称すものがあるので、靖康の末には司業の官にあったことになる。曾敏行の《獨醒雜志》には、‘建炎己酉（1129）董道は駕に従う’とあるので、宋が南に移ったときにはまだ生きていた。丁特起《孤臣泣血録》には彼が張邦昌に騙され、太学の学生たちを慰撫した事が書かれている。だとすればあまりたいした人物ではない”^{*3}とある。《宋史翼》巻27には、“董道、字は彦遠、山東東平の人。……靖康年間国子監祭酒、建炎元年四月学生たちをつれ南京に帝位につくべき事を勧めに行き、宗正

*1 原注：北宋欧陽脩《欧陽脩全集》巻六十一《序問》、北京：中華書局、2001年、第900頁。

*2 原注：吳国武《董道〈広川詩故〉輯考》、北京大学中国古文献研究中心集刊（第七輯）、北京：北京大学出版社、2008年、第152頁。

*3 原注：清永瑤等《四庫全書総目》中華書局1965年版 第959頁。

少卿に除せられた。2年五月江東提刑に除せられ、すぐに中書舎人に招かれ、徽猷閣侍制に充てられた”とある。その著述で現存するのは、《広川書跋》《広川画跋》《錢譜》の三種である。

董道の著した《広川詩故》については、清代朱彝尊《經義考》に既に亡佚とある。陳振孫《直齋書録解題》には、“《広川詩故》四十卷、董道撰。その学説は三家を兼ね取るもので、毛伝、鄭箋を伝授するものではない。そこでは、《魯詩》は各書籍の中に散見するばかりでその言うことはよく分からず、《齊詩》はまだ残っていて拠り所にでき、《韓詩》は残存するばかりだがそれでも参考にはできる、という。考えるに、《蔵書志》に《齊詩》六卷とあるが、現在の《館閣》^{*1}にはない。董道自身は隋唐に亡佚して久しいと言っているのだから、現在伝わるのがどこのものかは分からない、或いは後世の疑託でできたものかもしれない。だとすれば、どうして《齊詩》はまだ残っているなど言えるだろうか。しかしながら、そこに引用される諸家の文内容で毛伝と異なるものは、見聞を広め、細々と続く流れを継ぐには十分と言えよう”^{*2}とある。董道の《蔵書志》の中には《齊詩》六卷所蔵と書かれているのだが、陳振孫は已に疑っており信じていない。《齊詩》は三国魏に亡び、その後は書録に見ることはないのだから、この書はそもそも後人の擬作であり、漢代の《齊詩》説ではあるまい。馬端臨《文獻通考・経籍考》には“《広川詩故》四十卷”とあり、注に“《中興芸文志》掲載、董道撰。董道がいうには、‘班固は《魯詩》が本義に最も近いというが^{*3}、今は他の書を探して佚文を手に入れるばかりである。《齊詩》は残欠本で、或いは後人の疑託ではないかと疑うが、しかし、章句にはそれぞれ章立ての理由があって、変えられるものではない。《韓詩》は亡びたけれども、《外伝》および章句はまだ残っている。《毛詩》訓詁は完本で、最も遅く出現した。したがってそののみが伝授されていったのである’”と。詩によりながら三家によってその正偽を考えており、また《詩序》が決して子夏の作ではないと論じている。建炎中、董道はこの書

^{*1} 訳注：館閣は一般には図書や文献資料の政府の所蔵所のことを言うようだが、引用される《直齋書録解題》に云う《館閣》は南宋初年の陳騏の《中興館閣書目》をいう（著者からの教示による）。

^{*2} 原注：南宋陳振孫《直齋書録解題》卷二、徐小蛮、顧美華点校、上海：上海古籍出版社、1987年、第37頁。

^{*3} 訳注：班固《漢書》芸文志に“漢が起ころや、魯申公詩訓詁を作り、齊轅固、燕の韓生がそのために伝をつくった。《春秋》から取ったり、各種の説を採用したが、みなその本義からは遠く、ともにその正しい内容を示し得たものではなかったが、魯の説が最も真実に近いものだった”とある。

と共に南に下った。その志の社会性や学問の広汎さは、人物を理由に棄てられてはならない”という。

董道の《詩故》は“三家を兼ねて取り”、“毛詩によりながら三家によってその正偽を考える”というものである。董道は三家《詩》亡佚後、最も早く三家《詩》の遺説を収録し運用した学者だと言って良い。《広川詩故》が“三家を兼ねて取る”具体的な原貌はもはや分からないけれども、しかし、朱熹、呂祖謙、王応麟等の学者の著述には、それぞれ少なからぬ董氏《詩》説を勝れる解釈として引用しているので、その中から彼の三家《詩》運用の意識は既に明快であったことが考察可能である。北京大学呉国武先生は《董道〈広川詩故〉輯考》の論文で、南宋呂祖謙《呂氏家塾読書記》と朱熹《詩集伝》などの書籍の中に残る佚文 238 条、120 首の詩におよぶ佚文をまとめている*1。《輯考》にまとめられた佚文からは、《詩故》の三家《詩》の扱い方について、以下の幾つかの面に分析することができる。

一、董氏は当時残っていた文献から、《毛詩》とは違う異文を探し出して配列しており、そこには三家によるとの明言はないが、基づく拠り所が確かにあったこと、それは後の清代儒学者に依ってみな三家に出ることが確かめられている。

例えば、《周南・汝墳》“遵彼汝墳”について、董氏は、“大川があふれ出て別に小川を作ることをいう。故に‘墳’は‘瀆’に作るべきである。晋の郭璞は‘遵彼汝瀆’を引いて《爾雅》の証明としているので、晋の時代の《詩》のテキストではそもそもまだ‘瀆’だったのである”という。呉国武案語に、“黄侃《爾雅音訓》巻中には‘郭璞が汝瀆というのは、毛伝や鄭箋とも異なり、また李巡とも異なる。《魯詩》に基づいたのだろう。……《説文》ではそれを引用して汝を涓に作る。涓は小流である。正しく郭璞の注の分かれて小川となると合致する’”^{*2}とある。これより、董氏が《魯詩》に従ったことが分かる。また、《幽風・狼跋》の“赤舄几几”について、董氏は、“‘几几’、崔靈恩《集注》では‘擊擊’に作る。《説文》では一に‘己己’に作り、一に‘擊擊’に作る”という。王先謙《詩三家義疏》巻十三には、“三家では、‘几几’は‘擊擊’に作り、また‘己己’に作る”^{*3}とある。

*1 原注：呉国武《董道〈広川詩故〉輯考》、北京大学中国古文献研究中心集刊（第七輯）、北京大学出版社、2008、152 頁。下文所引《詩故》原文・董氏の言葉はともにこれに基づくので注は略す。

*2 原注：同上書、第 154 頁

*3 原注：清、王先謙《詩三家義疏》、呉格点校、北京：中華書局、1987 年、第 546 頁。

このような《毛詩》の異文の比較提示は、呉国武輯佚の中には三十余箇所ある。董氏がよった文献で最も多いのが崔靈恩《集注》*1である。この書は当時まだ存在していたが、その後亡びてしまったことがわかる。このほかに扱いき及ぶのは《爾雅注》《説文》《漢書》《方言》および顧野王《玉篇》などの文献に載る異文である。

二、直接《韓詩》の異文をあげる。《韓詩内伝》、《薛君章句》及び《韓詩叙》など関係する論述を含め、あわせて25箇所。

例えば、《邶風・秋風》“晞晞其陰”について。董氏は“韓詩は‘□□其陰’に作る。《章句》は‘天陰塵也’”というと言い、《衛風・考槃》（“考槃在阿”）では、董氏は“‘阿’、《韓詩》‘干’に作る。《章句》に‘地下にして黄なるを干という’”と言う。

《韓詩叙》の論述を引用する場合、例えば《小雅・常棣》では、董氏は“《韓詩叙》に‘夫移、兄弟を燕^{やすんず}ざるなり、管と蔡の道^{あわれ}を失うを閔むなり’”とある。いよいよ《毛詩》と合致する”と言う*2。

また、《韓詩》の論述を引用した上に、更に進んで解説を加えるものもある。例えば《小雅・雨無正》に、董氏は、“《韓詩》は‘雨無政、正大夫が幽王を諍るものである’”に作る。《章句》は‘無は、衆である’、《書》は‘庶草、繁蕪す’”といい、《説文》に‘蕪、豊なり’”という。であれば雨が繁きこととなるが、それは政令に統一がないからである。したがって、正大夫の諍りとしたのである”と言う。

現在集められた遺説のみによっても、董氏の《韓詩》の引用は少なくはない。多くの学者が《韓詩》が滅んだのは宋の南渡以後だと主張している。その多くは晁説之（1059～1129）の“劉安世（1048～1125）が《韓詩》を見た”と説くのをその証拠とする。呉国武先生は“《古佚書輯本目録》により、若干の《韓詩》輯本を比べると、少なくとも7箇所が董氏《広川詩故》にのみ見える*3”と言う。南宋の董道がまだ《韓詩》を見ることができたという可能性は無いとはいえない。

三、金石資料を引用し、《詩経》の異文の証拠としていること。董氏は金石学に精通して、卓越した成果を上げている。したがって、石経に残る異説を多く引用し、三家

*1 崔靈恩の《集注》：訳注《隋書経籍志》に《集注毛詩二十四卷》、注に「梁桂州刺史崔靈恩注」とある。

*2 訳注：毛詩小序に“常棣、兄弟を燕するなり、管・蔡の道を失うを閔み、故に常棣を作る焉”とある。

*3 原注：呉国武《董道〈広川詩故〉輯考》、北京大学中国古文献研究中心集刊（第七輯）、北京大学出版社 2008 第197頁。

《詩》に文字の違いがあることを明らかにした。

例えば、《召南・江有汜》“江有汜、之子婦”について、董氏は“汜、石経は‘涸’に作る。《説文》に詩を引き‘涸’につくる。恐らく古は‘涸’に作った、後世に訛ったのである”という。また、《邶風・擊鼓》の“擊鼓其鏜”について、董氏は、“鏜、石経は‘鏜’に作る、《説文》また‘鏜’に作る”と言う。呉国武案語に“王先謙《詩三家義集疏》卷三上に、“齊、韓、‘鏜’は‘鏜’に作るという”^{*1}とある。

四、《齊詩》の異文の引用が、3箇所ある。董氏は当時《齊詩》はまだ残っていたというが、学者の多くは信じない。しかし、彼が依る《齊詩》説は、多くが清代儒学者により確かめられている。

例えば、《邶風・七月》“猗彼女桑”では“（《齊詩》、猗を）猗に作る、概ね^〇猗き東ねることである”としている。《商頌・長髮》“為下国駿龐”では董氏は“《齊詩》、‘駿龐’に作る、馬の意味だ”という。

残念ながら《広川詩故》は既に亡佚し、その全貌を考察することはできない。《輯考》から分かるのは、《広川詩故》が“三家を兼ね取る”傾向が明らかだということだ。その“詩故”という名付け方は、概ね詩の意義に関する最も早い記載に考えを及ぼそうとしたところにある。よって、三家《詩》が遺した説に注意を向けたのも誠に自然なことだった。そのうえ、董氏は金石の学も大いに研究しているので、石経中に残る《詩経》の異字もまた彼の三家《詩》遺説への考察を触発したはずである。

3. 曹粹中の《放齊詩説》

曹粹中の著書に《放齊詩説》がある。《宋元学案》七《元城学案》には、“曹粹中、字は純老、号は放齋、定海の人である。莊簡公李光の娘婿。宣和六年の進士、黄州教授の職につく。秦檜派が宰相だった李光を通じて彼に面会を求めたが、先生は断った。妻にはこっそりと、‘岳父様もずっと宰相の地位を保てるわけではあるまい’と告げたのである。しばらくして李公は地位を追われ、‘私は婿殿に恥ずかしい’、と歎くことになった。先生はこれより隠居し、秦檜派の天下が終わるまで、出仕しなかったのである。李光は職を退き隠居して、《読易老人解説》を著すと、先生は《詩経》に箋をつけ、それ

*1 原注：同上書 第156頁。

ぞれそのすぐれたところで経学の研究をした。誠に百世の師と言うべきである”^{*1}と記載する。清全祖望の案語には、“深寧の王氏（王応麟）《四明七観》には、その経学に関して、放齋先生の《詩》を先ず推す。先生の《詩説》がでてより、舒広平、楊献子がこれを継ぎ、吾が郷土における《詩》学の主要なものとなった。慈湖の《詩伝》がこれを継いで起こった。咸淳年間（1265-74）の後、慶源の輔氏の《伝》がようやく寧波にまで至る^{*2}。だとすれば、吾が郷土の《詩》学者は、先生をその首座に推さないわけにはいかない”^{*3}とある。曹粹中《放齊詩説》が出てより、四明地区の《詩》学の発展に影響したことが分かる^{*4}。

《放齊詩説》の三家《詩》の利用で、目立つ特徴は三家《詩》の材料に注意して分析を加えたところにある。例えば《閔雎》の古説の違いについて、曹は“この時毛伝は未だおこなわれておらず、序文もまだ現れていない。学者がそれぞれ三家の説に従っているのだから、そこに違いがあるのは不思議ではない”^{*5}という。また例えば、《毛詩正義》に“《儀礼》では《召南》を三篇を歌い、《草虫》を越えて《采蘋》に跳ぶ。恐らく《采蘋》は以前《草虫》の前にあったのだろう”^{*6}と考えるところ、曹粹中は“《齊詩》では、きっと《采蘋》がきて後に《草虫》となっているはずだ”^{*7}と判断している。三家《詩》説を用いて、《毛詩》の論述と異なる部分に適切な解釈を探していて、三家《詩》説を巧に利用する点で更に歩を進めたものである。

4. 楊簡《慈湖詩伝》

楊簡《慈湖詩伝》は、朱彝尊《經義考》注に“既に亡佚”という。《四庫全書総目》には、“今、《永楽大典》に載せるものより集めて編輯する。それでも二十卷にはなる。また《慈湖遺書》内より《自序》一篇、《総論》四条を補録する。また《攻媿集》に載せる楼鑰と簡《詩解書一通》を巻首に附す。その他論弁若干は、それぞれ本解の下に付録して、考証の参考にした”^{*8}とある。今見られる《慈湖詩伝》が四庫館の編集者によ

*1 原注：清 黄宗羲輯、全祖望補修：《宋元学案》、商務印書館、第53頁。

*2 訳注：慶源の輔氏の《伝》：輔氏は輔広のこと。朱子の弟子。祖籍は趙州慶源。

*3 原注：同上

*4 訳注：四明地区、浙江省東部、四明山が連なる紹興から寧波までの一帯をさす。

*5 原注：南宋 段昌武《毛詩集解》卷一引、影印文淵閣《四庫全書》本。

*6 原注：唐 孔穎達等《毛詩正義・詩譜序疏》、十三經注疏本。

*7 原注：南宋王應麟《詩考》、影印文淵閣《四庫全書》本。

*8 原注：清 永瑢等《四庫全書総目》、北京：中華書局、1965年、第123頁。

て集め纏められてできた事が分かる。

楊簡《慈湖詩伝》自序には、“齊、魯詩は今滅び、韓詩にはその説がのこる。韓詩で毛詩よりもすぐれたものは、今そちらを採用する場合もある”^{*1}とある。《四庫全書総目》には、“訓詁を訂正するに、齊・魯・毛・韓以下、方言雑説に至るまで、幅広くあらゆるものを参考にしている。同異の折衷においては、自ずから一家の言を成すと言えよう”^{*2}という。

例えば《卷耳》“我姑酌彼金罍”“我姑酌彼兕觥”に、楊簡は、“《疏》に《韓詩》は、天子の罍には玉を用い、諸侯大夫はともに金を用い、士は梓を用いと説く。《毛詩》は、金罍、酒器なりと説く……《韓詩》は、觥、五升と説き、《毛詩》は、觥、大きさ七升と説く”と言っている。《羔羊》の“退食自公 委蛇委蛇”では、楊簡は“陸徳明《釈文》では、蛇を蛇に作る。《韓詩》が逶迤に作るにより、《毛詩》を間違いだとしてしまったのだ。また音を変えて蛇の音を移の音で読むというのだが、これは陸徳明が異を好むが故の間違いであろう。ましてや蛇は前の句の純と韻を踏むところで、移にしてしまうと韻が合わなくなる”^{*3}と言っている。

《考槃》の“碩人之過”では、楊簡は、“過は、《韓詩》では過に作る。草の小径のことだろうか、碩人がしばしば往来するのだろうか、後の句の永矢弗過の過と同音のはずである”という。《碩人》“鱣鮪發發”では、“發發、《韓詩》は鱣鱣に作る（按ずるに孽孽、《韓詩》鱣鱣に作る）《韓詩伝》に‘桀、健也’、《伯兮》に‘邦之桀兮’とあるので、桀には俊傑の意味もある。”《東山》“蒸在栗薪”に、“栗は、《韓詩》漻に作る”という。

《慈湖詩伝》では《韓詩》を引用して《毛詩》の解釈を明らかにし、並びに《韓詩》に沿って解釈を一步進め、自分の詩説を“自ずから一家となる”ものになっている。《韓詩》を引用する時に、出所を言わないのは、三家《詩》を利用し始めた早期ではよく見られる状況である。さらにその中では《易林》、《爾雅注》、《釈文》等古籍の中にみえる《毛詩》に異なる説をかなり多く引用しているが、当時は三家《詩》に帰属させる意識はまだはっきりしていなかったし、《毛詩》説と異なるものは三家《詩》に帰属するという

*1 原注：南宋 楊簡《慈湖詩伝》文淵閣《四庫全書》本。以下《慈湖詩伝》の引用文は此の本に基づき、注では示さない。

*2 原注：清 永瑔等《四庫全書総目》、北京：中華書局、1965年、第123頁。

*3 訳注：この部分《經典釈文》：“委蛇、本又た蛇に作る。同じ。音移。毛は委蛇、行に従うべき迹也と云う。鄭は委曲して自得の貌と云う。この句を読むに当に委蛇委蛇とよむべし。（謝）沈は委委蛇蛇と読む。韓詩は委迤に作り公正の貌と云う”とある。

観念もまだ出来上がっていなかった。したがって関係する著述には、《毛詩》の説に異なるものが即ち三家《詩》だと明確に指摘する表現はない。この観念は三家《詩》学の発展の過程の中で次第に形成されていったのである*1。

5. 項安世の《項氏家説》

項安世、字、平夫（一に平甫に作る）、号平庵、祖先は括蒼（今の施江麗水）の人、後に江陵（今湖北に属す）に家をおく。その著《項氏家説》は清代には既に失われ、四庫館員が《永樂大典》中より集めて十卷、附二卷とした。卷四の《説経篇四》が即ち《詩》説に関するもので、そこには《魯詩》と《詩諸家異字》の二篇がある。《魯詩》の中では先ず《列女伝》中の序語、例えば“《芣苢》、蔡人の妻の作なり”^{*2}などを示し、その後で“劉向の父祖代々《魯詩》の学説を受ける、故にその《列女伝》にこのように掲載するのである。既に古より遠く、ただ《毛詩》のみ残り、《韓詩》はそれでも《外伝》および《薛君章句》が残るが、齊、魯の二家は残っていない。従って魯学のわずかな部分が垣間見られるばかりなのである。よってこれを記録しておき現在の毛詩の序が必ずしもすべて古に記されたそのままのものとは限らないことを明らかにするのだ”^{*3}と言う。劉向の家学の淵源に基づき、《列女伝》に載せる《詩》説が《魯詩》の説だと推論するもので、これは後の三家《詩》輯佚中であうその帰属問題に対する重要な啓示であり、また清代儒学者が三家《詩》の来源とその帰属を探し求める重要な道筋を切り開くものだった。その他、《韓詩外伝》と《薛君章句》が当時まだ残っていたという情報も示している。しかし、《薛君章句》については、南宋から残る文献資料ではここに見えるだけで、他にそれを確かめる証拠もない。所謂孤証は定説とは為さずの原則から、《薛君章句》即ち《韓詩内伝》説が南宋当時に存在したか否かはずっと学術界の問題となっている。他日に新しい資料によりこの説が確かめられる事を待つばかりである。

《詩諸家異字》では、そこに列挙される“毛詩の内容を明らかにする”という異字は、みな三家《詩》より出るもので、項安世が三家の異字・異義によって毛詩説を補おうと

*1 訳注：諸説の佚文を三家《詩》のどの詩家に帰属させるかは、実際の所なかなか難しい問題である事、「先儒の三家《詩》遺説分類」批判（東洋学報26-2 渡邊末吾1939）参照

*2 訳注：《列女伝・貞順》に蔡人の妻と先ず述べられる女性がこの詩の一句を歌う所がある。ただしそこでは詩の題名を明示しているわけではない。

*3 原注：南宋 項安世《項氏家説》、影印文淵閣《四庫全書》本

する意図がよく表れている。三家《詩》の亡佚から久しく、百の内一つも残っていないのだから、それ自身では完全な《詩》説の体系は形成しづらい。したがって三家《詩》説の存在を示したり三家《詩》輯佚研究を完成させる重要な効果は毛伝内容を補充することになるわけで、これもまた清代儒学三家《詩》輯佚研究後期における明らかな方向となる。さらに、ここで三家の異字を専ら述べていることは、簡略なものとはいえ、三家《詩》の異字の存在がすでに《詩經》学では無視できない現象となっている事を証明するものである。しかし、清代における三家《詩》異文異字考釈の領域での成果の豊かさが、この影響を受けてのものかどうか、それはまだ分からない。

6. 鄭樵の《詩辨妄》

鄭樵（1104-1162）、字は漁仲、南宋興化軍莆田の人、世間では夾漈先生と称される。鄭樵は生涯科挙に応ぜず、刻苦勉強して学ぶこと30年、古今の書籍を遍く読むことを志し、その一生は著述に専念された。統計によればその著述は84種に達するが、大部分は散佚や亡佚となっている。現在では《通志》、《夾漈遺稿》、《爾雅注》、《詩辨妄》及び残存する遺文があるばかりである。

鄭樵の《詩辨妄》は毛詩の序説を棄てた先駆けで、その後の朱熹の《詩集伝》中の序を棄てて用いずという態度に大きな影響を与えた。《詩辨妄》は既に失われ、その説は周孚（1135～1177）の《非詩辨妄》及び《文献通考》等の著述の中に多く保存されているが、輯本は顧頡剛のものしかない。鄭樵の《詩辨妄》自序には、“毛詩”は鄭玄が箋をつけた後、学者は鄭玄を信じるに厚く、従ってこの《詩》のみが行われて、三家は遂に棄てられたのである。《齊詩》は魏に亡び、《魯詩》は西晋に亡んだ。隋唐の時代、《韓詩》はまだ参考にできるものが残っていた。五代の後には《韓詩》もまた亡んだ。現在では学者は毛氏に依るばかりで、しかも《序》を子夏の作だとして、疑問を呈しもしない。一方的な話ばかりであれば、裁判で一方の話ばかりを聞く過ちのようなものではないか*1”とある。鄭樵は、現在の“毛氏に依るばかりで、しかも《序》を子夏の作だと考える情況”が生まれたのは、三家《詩》の亡佚によって、“一方の話ばかりを聞く過ち”が原因だと考える。その言葉の裏では、もし三家《詩》が残っていたら、こんな情況にはならなかったと言いたいこと、誠に明白である。鄭樵のその当時の目的は

*1 原注：引用の鄭氏原文は顧頡剛輯本、《統修四庫全書》影印本に依る、以下同じ。

《詩序》の辨析にあり、したがって三家《詩》の問題に深入りすることはなかった。しかし、その後、序を棄てるという鄭樵の思想の影響を深く受けた朱熹は、《詩集伝》の中で三家《詩》説を採用し、毛伝を棄てて用いていない。或いは鄭樵のこの言葉に啓発を受けたのかも知れない。

鄭樵は、“漢代で《詩》を語りうるのは三家のみである。毛公は、趙の人物で、最後に現れ、当時は信用されるまでには至っていない。その説をごまかし、その伝が子夏の作だと称するのは、恐らく《論語》に、私を啓発するのは商（子夏）である、彼こそ共に《詩》を語れるのだ、とあるところに基づくのであろう”と言い、また、“漢人が三家を尊び、毛氏を採用しなかったのは、あちこち取るべきものがあっただけけれども、ただデタラメなところがあるので、当時の人々に賤しまれたからである”とも言い、また“残念なことだ、三家の詩が世に共に伝わらなかったのは。齊魯の二家は途切れて亡びたが、韓詩は世にまだ伝えられているのではあるまいか”とも言う。鄭樵にすれば、四家の《詩》を比べると、現れた時間では、毛詩が一番後であり、四家《詩》の漢代での流行の状況では、三家の説が盛んに行われているが、《毛詩》といえは“デタラメなのところがあり、当時の人々に賤しまれた”と言うのである。この比較からすると、三家《詩》説が毛伝よりもすぐれていた事が分かるのだが、その後に《毛詩》のみ行われる状況になったのは、三家《詩》がつぎつぎに亡び散佚してしまったからだということになる。鄭樵は三家《詩》に関する仕事はしていないけれども、先掲の言論からすると、少し後れる朱熹へ影響を与えたばかりでなく、清人の三家《詩》輯佚にまでも影響を与えている。清人の輯佚の過程において、例えば王先謙の《詩三家義集疏》のように、三家《詩》の発掘を通して毛詩に反駁したり三家《詩》が毛伝よりもすぐれている事を証明するのは、正しく鄭樵の先掲の考え方の具体的な実践なのである。鄭樵の啓発の力は、何とその功績の大きいことであろうか。

7. 呂祖謙の《呂氏家塾讀詩記》

呂祖謙、一つの字は伯恭、世間では東萊先生と称される。隆興元年（1163）に進士及第。呂祖謙は《毛詩》を崇拜し、《序》によって《詩》を説いた。その《呂氏家塾讀詩記》では、まず最初に大序小序を述べるとき、程頤の“《詩》を学ぶとき序に依らないものは、

あたかも部屋に入るときに入り口から入らないようなものだ」との言葉を引く*1。しかし呂祖謙は三家《詩》に対して決して見識が無かったわけではない。例えば、“魯、齊、韓、毛、各師の読み方は異なり、解釈内容も同じではない。魯、齊、韓の解釈で今に残るものを比べれば、ただ《毛詩》のみ概ね経と伝が一致する。《閔雎》は正風の初めである。三家の場合はこれを諷刺するものとする。他もこれから推し量れよう。したがって《毛詩》の内容が最もその真実を得たものなのである。中には反復や重複などがあり、時には経文の意図を失したものもある。例えば《葛草》、《卷耳》の類である。蘇氏は一人に出る言葉ではないと考えた*2が、多分それが近いのではないか。その最初の一文ばかりにとらわれて、それ以外部分まで無視してしまうようであれば、間違いも容易に起こってしまう”との発言がある。とはいっても、その中では各説を共に用い、またまとめており、大小遺すところがない。

呂氏は董道の《詩故》の中の《韓詩》説をあちこちに引用したばかりではなく（既に上文に見えるように、董道の説は多くが《呂氏家塾説詩記》から集められている）、自分でも三家《詩》説を集めた利用していて、《釈文》《爾雅》の中から毛伝と異なるものを大量に引用している。例えば巻二で《閔雎》序に“《漢書》に匡衡が言う、孔子は詩を論じるのに《閔雎》から始めた、その心は、太上なるものは民の父母であり、后夫人の行いが天地に等しからねば神霊の綱領を遵奉して、万物の道理を整えることができないと”、“君子好述、《釈文》にいう、述は一本は仇に作ると”、“輾轉反側、《釈文》に“輾はまた展に作る”。巻二では、“我姑酌彼金罍（《卷耳》）”に孔氏を引いて言う、“《韓詩》では、‘罍は天子は玉で作り、諸侯は皆金で作り、士は梓で作るといふ。’……《韓詩》では天子は玉で作ると言うが、経文に明文はない”。巻三、“《采蘋》に‘于以采蘋、于以采藻’とあるが、《釈文》では‘《韓詩》では、沈むものが蘋で、浮くものが藻とある’と言う”。“《羔羊》の‘素絲五紞、委蛇委蛇’は、《釈文》では紞を它に作り、ある本は紞に作り、蛇は虵に作る、ある本ではまた蛇に作るという”、“《標有梅》は、《釈文》は梅に、《韓詩》では楛に作る”。《泉水》では“‘恣彼泉水’、《釈文》に、‘恣、《韓詩》では秘に作る、《説文》泌に作る’という”。“‘飲饒于祿’、《釈文》は‘祿、《韓詩》は柅に作る’という”。《北門》では“‘王事敦我’、《釈文》は‘敦、《韓詩》は敦、迫るな

*1 原注：南宋 呂祖謙《呂氏家塾説詩記》、文淵閣《四庫全書》本。以下この書原文はこれに依る。以下注はつけず。

*2 訳注：宋 蘇轍《詩集傳》卷一の語

りとある’ という”。卷五、“《柏舟》‘髭彼兩髭’、《積文》は‘髭、韓詩は髭に作る’ という”。“‘実維我特’、《積文》は‘特《韓詩》は直に作る、相値すをいうなり’ という”等、三家《詩》の遺文や補説を記録している。

《読詩記》に引用される三家《詩》説は、清代の学者も多く参照し或いは更に進んだ考証を行った。例えば徐堂《韓詩述》卷四では、“《読詩記》二十一引く《韓詩》に《四月》、徴役を嘆くなり*¹と云う”として、更に考察を加え、《孔叢子・記義篇》、徐幹《中論・遣交篇》の関係する論述を引用し、《読詩記》に引く《韓詩》の“《四月》徴役を嘆くなり”の意義を考証している。とはいえ、宋代にあつては、三家《詩》遺説の収集はまだ草創期だったので、引用資料の間違いや粗雑な選択といった情況も多く起こっていた。清代の学者はこの現象についても多くの考証がある。例えば臧庸の《韓詩訂訛》の前十二条は呂祖謙の《読詩記》の誤りを正したものである。詳しくは後に述べる*²。これも清代儒学者が前人の三家《詩》説に対する選択弁別、その利用に注意を傾けていたことを反映するものである。

呂祖謙は南宋の詩序遵奉学者の代表であつたが、序の解説を述べたその代表著述《読詩記》の中には、大量に三家《詩》説が引用されていること、これは三家《詩》説が既に学者の一部に目され、毛詩の意義を明らかにするための補充作用が学者たちに既に認められていたこと、またそのうえ《詩》の解説の著述の中で利用されていたことを物語るのものなのである。

以上述べた諸学者の三家《詩》に対する態度と用い方から分かるのは、三家《詩》の関わる問題が学者の関心を引いたその理由は、古典や経典を疑う思潮の発展の間接的結果であるとしても、その直接の結果となると、《詩經》学発展の領域で、詩序を疑い、詩序を棄て、毛伝や鄭箋の説に対する反駁へと進む考察となることだ。宋代儒学者の詩序廃棄説および毛伝鄭箋の説への反駁の最も有力な武器が三家《詩》の探求だった。例えば、三家《詩》序の存在は、詩序が子夏の作ではない事を証明し、そこから《詩序》の權威性を打ち破り、後世の学者により客観的で理性的に《詩序》が見えるようにさせたのである。三家の遺説は、ある面では詩篇の本義により近かった。例えば三家《詩》の用字が詩の内容の理解に一層役立つので、学者の中には採用する者もいて、毛伝鄭

*¹ 原注：清徐堂《三家詩述・韓詩述》、清抄本、復旦大学図書館蔵。

*² 訳注：原書では129頁に専論あり。

箋の説に反駁する有力な証拠となったのである。宋代の王室は軟弱だったので、北宋の儒者が經学の著述で道理を明らかにすることに力を入れたのは、世間の人々の心を支える助けとなった。三家《詩》の“經に通じ用を致す”という學術傳統が宋代儒學者のこの精神面での追求と一致したのである。このほか、宋代の金石学の発展と宋儒が經書古籍収集を好み、經典の古い解説を探し求める気風も、學者たちに三家《詩》説の存在に注意を向けさせる力になっている。前期學者の三家《詩》説の研究利用の累積の基礎があつてこそ、その後に朱熹の《詩集傳》での三家《詩》説の採用、及び王應麟の三家《詩》を直接輯佚する著録《詩考》が現れるのである。（以下続稿）